標本調査改善国際会議

「標本調査改善国際会議（International Conference on Improving Surveys/ICIS2002）」は EU 統計局，SAS Institute，国際調査統計家協会（IASS），米国統計学会標本調査部会等の後援のもと，デンマーク国立社会調査研究所（組織委員長：Hans Bay 博士）の主催で，2002年 8 月25～28日に，コペンハーゲン大学で開催された．26日朝に EU 統計局の Luthar Jensen 博士による挨拶が行われた後の 2 日半で 4 つの基調講演と24のセッション（ 4 本が同時並行）で標本調査の改善に関する各種の報告が行われた．参加者は欧米中心の百数十人であったが， 4 つの教室に均等に分散することは少なく，混雑する場合もあった．

人口研究では標本調査データが頻繁に実施・分析されているにも関わらず，内外の人口関係の学会ではなかなか扱われない内容を扱う貴重な会議であった．他の人口研究者も同じようなことを考えるためか，フランス国立人口研究所の Marie DIGOIX と Armelle ANDRO の両氏が参加していたが，報告はしないとのことであった．筆者は「社会学的研究」のセッションで "Who Are More Likely to Make a Neutral Choice in Japan?: The Case of Opinion about Non-Obligation to Have Children After Marriage" と題された報告を JGSS の予備調査のロジット分析に基づいて行った．

日本統計学会等の大会でも標本調査の実施・分析の方法論に関するセッションが増え，国内でも勉強の機会が得られることを切望する次第である．（小島　宏記）

第 1 回世界中東研究会議

ヨーロッパ各国の中東学会はヨーロッパ中東学会（EURAMES）という連合体を作っており，第 1 回世界中東研究会議（First World Congress for Middle Eastern Studies/WOCMES）は同学会の会長でマインツ大学地理学科アラブ世界研究センター（CERAW）所長の Gunter MEYER 教授が2002年 9 月 8 ～13日に同大学で開催した．この日程は2001年の 9 . 11事件の前に決まっていたが，事件後，それを記念する行事として，世界平和を祈る集会や WOCMES 賞授賞式が 9 月11日の夜に行われることになった．いずれにしても 9 月 9 日午前の開会式以後， 4 日半にわたって333の公式セッションが1,500人以上の参加者を得て開催されたことは中東研究の歴史に残る快挙であったと言えよう．日本中東学会（会長：加藤　博・一橋大学経済学部教授）がスーフィズムのセッションを組織し，世界の中東研究の現状に関するセッションで報告するとともに，登録エリアに特設ブースを設け，日本の研究成果の普及に務めたことも快挙と言えよう．

当初の論文募集の段階では人口研究が対象分野に入っており，以前カイロの経済・法律・社会研究センター（CEDEJ）所長でフランス国立人口研究所研究部長の Philippe Fargues 博士が人口関係のセッションを組織することになっていたこともあり，応募した．しかし，同博士は参加せず，セッションも組織されず，人口研究者による報告は国内人口移動，国際人口移動，都市化，女性等のセッションに分散することとなった．人口と銘打たなくても，たとえば「アラブ社会における女性」のセッションでは山口大学の伊達潤子氏がイエメンの女性の健康について，Population Council カイロ支部の Barbara Ibrahim & Rania Salem 両氏がエジプトの若年女性のコミュニティー参加について報告されたが，いずれも人口の質的な研究の報告であった．最後にピサ大学の人口学者 Odo Barsotti & Laura Lecchini 両氏によってモロッコの女性の地位と地域開発について重回帰分析に基づく報告がなされた．なお，筆者は「中東の国内人口移動」に関するセッションで「東南アジアにおけるイスラムと持続可能な都市化」と題された報告を行ったが，このセッションではタブリーズ大学の人口学